

平成 21 年 6 月 23 日現在

研究種目： 若手研究 (B)
 研究期間： 2007 ～ 2008
 課題番号： 19730529
 研究課題名 (和文) 事象(イベント)としての犯罪・非行に対する地域住民の社会的コントロール
 研究課題名 (英文) The people's social control to crime and delinquency as event
 研究代表者
 横山 卓 (YOKOYAMA TAKASHI)
 福岡女子短期大学・文化コミュニケーション学科・講師
 研究者番号： 60369387

研究成果の概要：本研究の目的は、子どもの犯罪被害や非行の発生機会を減少させるために、今日、地域住民がどのような抵抗性（犯意ある行為者の力を押し返す）、領域性（犯意ある行為者に「ここから先は入れない」と知らしめる）、監視性（侵入してきた犯意ある行為者の行動を把握できる）を示しているかを明らかにすることにある。世代を分析軸として得た主要な知見を述べれば、以下のようなものである。(1)子どもの抵抗性を喚起する必要性はどの世代でも感じているが、それを実行に移しているのは高年世代である。(2)高年世代ほど地域組織防犯活動の効果を認めており、参加意欲をもっており、現に参加している。(3)地域で不審人物を見かけたり、叫び声を聞いたり、夜間子どもが一人で見かけたり、子どもが喫煙しているの見かけたりしたときにアクションを起こすのは高年世代である。(4)こうした高年世代の傾向は、その地域生活構造のあり方（地域の人々とのコミュニケーション頻度の高さ、地域愛着度の高さ）や公的機関に対する認識（活動に対する認識度・信頼度の高さ）を反映していると推測される。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
年度			
総計	1100,000	60,000	1160,000

研究分野：発達社会学、犯罪社会学、地域教育社会学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：犯罪、非行、地域社会、社会的コントロール、抵抗性、領域性、監視性

1. 研究開始当初の背景

(1) 京都小学校児童殺害事件 (1999 年) や大阪小学校児童教員殺傷事件 (2001 年) などを受けて、いまや、「子どもの安全確保」は、大きな社会的課題となっている。行政による各種取組も盛んである。文部科学省の「子

も安心プロジェクトの充実」(2009 年度 20 億円)、警察庁の「安全・安心なまちづくりの推進～子どもの安全・安心を中心に～」(2009 年度 40 億円)、福岡県の「福岡県安全・安心まちづくり条例」(2008 年施行)、福岡県警の「ふっけい安心メール」配信システム、福岡

市の「パトカー走って安全っ隊」（市役所で使用していた軽自動車を使用期間の満了後、校区の見守りのために、要望のある校区自治協議会に譲渡するという事業）など。非公的機関による自主防犯活動も数多く見られる。自主防犯ボランティア団体の数を見てみると、平成16年時点では8,079団体、これが平成17年には19,515団体と急増し、平成19年には37,774団体となっている（警察庁, 2008, p88）。言うまでもなく、こうしたさまざまな取組・活動が効果を発揮するためには、中村（2000, p13）が指摘するように、「どこで」「どんな形で」子どもたちが被害に遭っているのかを、取組主体が把握しておく必要がある。子どもたちの被害の実態を把握していなければ、どこにどう力を注げばよいのか分かるはずもないからである。

(2) 警察庁（2009, pp. 121-124）によると、平成20年中に少年（20歳未満）が被害者となった刑法犯の認知件数は28万9,035件、罪種別に見ると「窃盗犯」が最も多く25万179件、次いで「暴行」6,004件、「傷害」5,516件、「恐喝」2,613件となっている。では、どんな場所で被害に遭っているのか。最も多いのは「駐車（輪）場」で13万2,087件、次いで、「道路上」5万774件である。それでは、「駐車（輪）場」や「道路上」とは、具体的にどういった場所なのか。中村（2000）のフィールド調査（子どもが実際に被害に遭った300余の現場調査）によると、①誰もが簡単に出入りできる、②障害物があったり人影が少なかったりして人目に付きにくい、という空間的特徴をもつという。小宮（2005）の言葉を借りれば、「入りやすく」「見えにくい」場所こそが、犯罪被害の発生しやすい場所なのである。

(3) 環境犯罪学は「場所」あるいは「空間」に着目する。従来の犯罪原因論が「人」に着目し、その内に「犯意」が生じないよう原因追及していくのに対して、環境犯罪学は「場所」あるいは「空間」に着目し、「犯行」という事象（イベント）が生じないよう、如何に「場所」や「空間」をコントロールしていくかを探っていく。G. ケリング（2004）の「割れ窓理論」、M. フェルソン（2005）の「ルーティン・アクティビティ・セオリー」、小宮（前掲）の「犯罪に強い3つの要素」などはいずれもこの立場に立つ。日本でも数多くの理論的・実証的研究が行われているが、子どもの犯罪被害や非行の発生を予防するためのコントロールに焦点を当てた実証的研究は見られない。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、子どもの犯罪被害や非

行という事象（イベント）に対する地域住民の社会的コントロールの現代的様相を、とくに世代を分析軸として明らかにすることを目的としている。環境犯罪学の立場に立った取組・活動については、二側面のアセスメントが必要であるように思われる。一つは、子どもの犯罪被害や非行の実態を明らかにすること。そして、もう一つは、それを社会的にコントロールしていこうとする取組主体・活動主体の準備状態を明らかにすることである。本研究は後者に属している。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、「社会的コントロール」を、小宮の「犯罪に強い3つの要素」の観点から捉えた。すなわち、子どもの犯罪被害や非行の発生機会を減少させるために、今日、地域住民がどのような抵抗性・領域性・監視性を示しているかを明らかにしようとしたわけである（下図参照）。

犯罪の機会(状況)		犯罪に強い要素	ハードな要素	ソフトな要素
標的	What, Whom	抵抗性	恒常性	管理意識
場所	Where, When, How	領域性	区画性	縄張意識
		監視性	無死角性	当事者意識

(2) では、子どもの犯罪被害・非行に対する地域住民の抵抗性、領域性、監視性を、今度はどのように指標化していくか。本研究では、以下のように指標化し、その現代的様相を捉えようとした。

- ①抵抗性：地域の子どもたちに「防犯グッズを携帯した方がよい」などの声かけをして、子どもたち自身が犯意ある行為者の力を押し返せるよう努めている（子どもたちの抵抗性を喚起している）。
- ②領域性：組織的な地域防犯活動に参加して地域社会に目を向け、犯意ある行為者に「ここから先は入れない」、あるいはここで非行行動はできないと知らしめている。
- ③監視性：地域の子どもたちの犯罪被害場面

や非行場面（あるいは、それに発展しそうな場面）に直面したときに、見て見ぬふりをせず、声かけをして「犯行」発生の抑止・予防に努めている。

(3) また、子どもの犯罪被害・非行に対する地域住民の社会的コントロール（抵抗性・領域性・監視性）のあり方を左右すると思われる要因として、①地域生活構造、②子どもの犯罪被害・非行の実態に関する認識、③組織的な地域防犯活動の実態に関する認識等を取り上げて調査に反映させた。

(4) データを得るべく、福岡県内において都市圏を構成している中核都市と周辺部を対象地としてサンプリングを行い、2市2町の選挙人名簿（2市1町は平成19年9月現在、1町は平成19年12月現在）から合計2,123名を抽出し、平成19年11月～平成20年2月にかけて郵送法による調査を実施した。全回収票数は787票（回収率37.1%）、うち有効回収票数は777票（回収率36.6%）だった。

4. 研究成果

(1) 子どもの抵抗性を喚起する必要性はどの世代でも感じているが、それを実行に移しているのは高年世代である。表1にあるよう

表1 あなたは、ふだん、お住まいの地域の子どもたちに対して、実際に次のようなことをすることがありますか

	多額の現金を持ち歩かないように声をかける	防犯グッズを携帯した方がよいと声をかける	危険な場所に行かないように声をかける	見知らぬ人についていかなないように声をかける	一人で遊ばないように声をかける	夜遅くまで遊ばないように声をかける	一人で留守番しているときは、電話や来客に声をかける	一人で登下校しないように声をかける
若年世代	20 9.9%	33 16.3%	61 30.3%	53 26.2%	50 24.8%	53 26.2%	40 19.9%	45 22.4%
中年世代	59 20.3%	55 18.9%	128 43.4%	113 38.8%	102 35.1%	120 41.2%	83 28.5%	91 31.3%
高年世代	45 22.0%	55 27.4%	117 55.7%	120 56.1%	99 47.8%	111 52.9%	66 32.5%	91 45.0%
全体	124 17.8%	143 20.8%	304 43.4%	286 40.5%	251 35.9%	284 40.4%	284 27.2%	189 32.7%
カイニ乗検定	**	*	**	**	**	**	*	**

表2 あなたは、お住まいの地域の子どもたちに対して、次のようなことは必要だと思いますか

	多額の現金を持ち歩かないように声をかける	防犯グッズを携帯した方がよいと声をかける	危険な場所に行かないように声をかける	見知らぬ人についていかなないように声をかける	一人で遊ばないように声をかける	夜遅くまで遊ばないように声をかける	一人で留守番しているときは、電話や来客に声をかける	一人で登下校しないように声をかける
地域の子どもが小学生の場合	501 71.3%	518 74.2%	625 88.8%	633 89.3%	598 84.5%	630 89.2%	501 71.8%	563 80.4%
地域の子どもが中学生の場合	532 75.5%	472 67.7%	547 77.9%	500 71.5%	432 61.8%	589 83.9%	382 55.0%	412 59.3%
地域の子どもが高校生の場合	482 68.8%	392 56.7%	479 68.5%	401 57.9%	300 43.6%	527 75.4%	254 36.9%	270 39.1%

に、ここで設けた項目のすべてにおいて有意差が認められ、高年世代ほど子どもの抵抗性を喚起すべく声かけをするという行動を実際に行っている。では、声かけの必要性についての感じ方が世代間で異なるのかというとそうではなく、必要性については有意な世代差は見られなかった。なお、声かけの必要性は、相手である地域の子どもが学校段階によって異なっている。表2からわかるように、地域の子どもが学校段階が低いほど、声かけ

の必要性を感じている。

(2) 高年世代ほど組織的な地域防犯活動の効果性を認めており、それゆえに参加意欲をもっており、実際に参加している。表3にあるように、ここで設けたすべての項目において有意差が認められ、組織的な地域防犯活動への参加度には世代差が見られた。「地域周辺のパトロール」や「子どもの登下校時の見守り活動（立ち番）」といったPTAが主体となっていると思われる活動については若年・中年世代が参加しており、それ以外の活動については高年世代が参加している。表4は、地

表3 あなたは、ふだん、次のようなことをしていますか

	地域周辺のパトロールに参加している	子どもの登下校時の見守り活動（立ち番）に参加している	子ども110番の家やステッカーを自宅に貼っている	あいさつ運動・声かけ運動に参加している	住民参加のレクリエーション活動に参加している	有害環境改善運動に参加している
若年世代	26 12.9%	32 15.8%	16 7.9%	26 12.9%	39 19.4%	15 7.4%
中年世代	75 25.3%	49 16.6%	38 12.9%	66 22.3%	105 35.5%	26 8.8%
高年世代	36 16.1%	17 7.7%	46 20.3%	52 23.5%	90 40.4%	34 15.3%
全体	137 19.0%	98 13.6%	100 13.8%	144 20.0%	234 32.5%	75 10.4%
カイニ乗検定	**	**	**	*	**	*

表4 あなたは、今後、機会があれば、地域防犯活動に参加したいと思いますか

	積極的に参加しようと思う	ときどき参加しようと思う	あまり参加しようと思わない	ぜんぜん参加しようと思わない	わからない	合計
若年世代	20 9.9%	86 42.6%	42 20.8%	14 6.9%	40 19.8%	202 100.0%
中年世代	35 11.7%	162 54.4%	47 15.8%	11 3.7%	43 14.4%	298 100.0%
高年世代	43 18.3%	102 43.4%	32 13.6%	11 4.7%	47 20.0%	235 100.0%
全体	98 13.3%	350 47.6%	121 16.5%	36 4.9%	130 17.7%	735 100.0%
p<0.1						

表5 あなたは、地域防犯活動は効果的だと思いますか

	非常に効果的だと思う	ある程度効果的だと思う	あまり効果的だとは思わない	ぜんぜん効果的だとは思わない	わからない	合計
若年世代	61 30.2%	125 61.9%	11 5.4%	5 2.5%	202 100.0%	
中年世代	100 33.7%	171 57.6%	15 5.1%	11 3.7%	297 100.0%	
高年世代	107 44.8%	100 41.8%	16 6.7%	16 6.7%	239 100.0%	
全体	268 36.3%	396 53.7%	42 5.7%	32 4.3%	738 100.0%	
p<0.1						

域防犯活動への今後の参加意欲を見たものだが、中年・高年世代ほど参加意欲をもってしている。さらに、表5は、地域防犯活動の効果性を見たものだが、高年世代ほど活動は効果的だと認めている。すなわち、高年世代は、他の世代と比較して、地域防犯活動は効果的だと感じており、だからこそ参加が強制ではないような（当番制ではないような、自主的な参加が求められる）地域防犯活動にも積極的に参加し、今後も参加しようと思っているのである。

(3) 地域で不審人物を見かけたり、叫び声を聞いたり、夜間子どもが一人であるのを見かけたり、子どもが喫煙しているのを見つけた

りしたときにアクションを起こすのは高年世代である。「地域で不審人物を見かけたらどうするか」、「地域で夜中に外から叫び声が聞こえてきたらどうするか」を問うたところ世代差が認められ、いずれについても積極的な行動をとるとしたのは高年世代であった。すなわち、前者では、高年世代は「ご近所に連絡をする」とし、若年世代は「不審に思うがとくに何もしない」とした。後者では、高年世代は「警察に通報する」とし、若年世代は「注意して様子を窺う」とした。表6および表7は、「夜遅くに子どもが一人でのを見かけたらどうするか」を問うたものであ

表6 あなたが、もし、次のような場合に遭遇したら、声をかけますか(相手が顔見知りの子どもの場合)

	お住まいの地域で、顔見知りの小学生が夜遅くに一人で外にいるのを見かけたら、声をかける	お住まいの地域で、顔見知りの中学生が夜遅くに一人で外にいるのを見かけたら、声をかける	お住まいの地域で、顔見知りの高校生が夜遅くに一人で外にいるのを見かけたら、声をかける
若年世代	185 91.1%	147 72.6%	109 51.3%
中年世代	283 94.0%	237 78.3%	181 60.7%
高年世代	230 93.9%	190 77.6%	130 54.9%
全体	698 93.2%	574 76.8%	418 56.4%

カイニ乗検定 N.S. N.S. N.S.

表7 あなたが、もし、次のような場合に遭遇したら、声をかけますか(相手が見知らぬ子どもの場合)

	お住まいの地域で、見知らぬ小学生が夜遅くに一人で外にいるのを見かけたら、声をかける	お住まいの地域で、見知らぬ中学生が夜遅くに一人で外にいるのを見かけたら、声をかける	お住まいの地域で、見知らぬ高校生が夜遅くに一人で外にいるのを見かけたら、声をかける
若年世代	102 50.5%	208 11.8%	15 7.4%
中年世代	268 69.3%	81 27.0%	42 14.0%
高年世代	201 83.8%	128 53.3%	79 31.6%
全体	571 68.9%	233 31.4%	132 17.8%

カイニ乗検定 ** ** *

る。その子どもが「顔見知りの子どもか、見知らぬ子どもか」、「小学生か、中学生か、高校生か」の別に分けて見た。相手が顔見知りの子どもの場合には世代差は認められず、どの世代も同じ程度に声かけをするとしている。しかし、見知らぬ子どもの場合には世代差が認められ、高年世代ほど声かけをするとしている。なお、表から明らかであるが、全体的に、相手が顔見知りの子どもであるほど、そして小学生であるほど声かけをするとしている。子どもの非行に対するアクションについても同様の傾向にある。表8～表10は、「見知らぬ子ども(小学生、中学生、高校生)が喫煙しているのを見つけたらどうするか」を問うたものであるが、いずれにおいても有意差が認められ、高年世代は「声をかけて注意する」とし、若年世代は「見て見ぬふりをする」あるいは「注意するほどの問題ではないので放っておく」としている。

表8 あなたは、お住まいの地域で、実際に見知らぬ小学生が喫煙しているのを見つけたら、どうしますか

	声をかけて注意する	近隣の交番に通報する	近隣の中学校に連絡する	注意したいが見て見ぬふり	注意するほどの問題ではないので放っておく	その他	合計
若年世代	79 39.9%	19 9.6%	24 12.1%	60 30.3%	11 5.6%	5 2.5%	198 100.0%
中年世代	159 55.6%	15 5.2%	32 11.2%	66 23.1%	5 1.7%	9 3.1%	286 100.0%
高年世代	165 72.4%	11 4.8%	15 6.6%	32 14.0%	1 0.4%	4 1.8%	228 100.0%
全体	403 56.6%	45 6.3%	71 10.0%	158 22.2%	17 2.4%	18 2.5%	712 100.0%

p<.01(但し、セルの5%は期待度数が5未満)

表9 あなたは、お住まいの地域で、実際に見知らぬ中学生が喫煙しているのを見つけたら、どうしますか

	声をかけて注意する	近隣の交番に通報する	近隣の中学校に連絡する	注意したいが見て見ぬふり	注意するほどの問題ではないので放っておく	その他	合計
若年世代	28 14.0%	27 13.5%	30 15.0%	87 43.5%	23 11.5%	5 2.5%	200 100.0%
中年世代	52 18.1%	29 10.1%	48 16.7%	126 43.9%	19 6.8%	13 4.5%	287 100.0%
高年世代	88 37.8%	27 11.6%	29 12.4%	80 34.3%	2 0.9%	7 3.0%	233 100.0%
全体	168 23.3%	83 11.5%	107 14.9%	293 40.7%	44 6.1%	25 3.5%	720 100.0%

p<.01

表10 あなたは、お住まいの地域で、実際に見知らぬ高校生が喫煙しているのを見つけたら、どうしますか

	声をかけて注意する	近隣の交番に通報する	近隣の高校に連絡する	注意したいが見て見ぬふり	注意するほどの問題ではないので放っておく	その他	合計
若年世代	6 3.0%	28 14.1%	8 4.0%	94 47.2%	58 29.1%	5 2.5%	199 100.0%
中年世代	27 9.3%	35 12.1%	14 4.8%	180 55.2%	37 12.8%	17 5.9%	290 100.0%
高年世代	46 20.4%	43 19.0%	9 4.0%	111 49.1%	10 4.4%	7 3.1%	226 100.0%
全体	79 11.0%	106 14.8%	31 4.3%	385 51.0%	105 14.7%	29 4.1%	715 100.0%

p<.01

いので放っておく」としている。

(4) こうした高年世代の傾向は、その地域生活構造のあり方(地域の人々とのコミュニケーション頻度の高さ、地域愛着度の高さ)や公的機関に対する認識(活動に対する認識度・信頼度の高さ)を反映しているのではないかと推測される。表11及び表12は、地域住民の人間関係を示したものである。高年世代ほど地域の大人や子どもたちとのコミュニケーション頻度が高い。表13を見ると、地域への愛着度も高年世代ほど高い。また、表14～表16は行政・警察の活動についての認識を問うたものであるが、高年世代ほど見聞きし、信頼度・満足度も高い。高年世代は、

表11 あなたは、お住まいの地域で、子どもたちと話をすることがありますか、ありませんか

	よく話をする	ときどき話をする	あまり話をしない	ぜんぜん話をしない	合計
若年世代	19 9.3%	48 23.5%	39 19.1%	98 48.0%	204 100.0%
中年世代	25 8.3%	100 33.2%	102 33.9%	74 24.6%	301 100.0%
高年世代	32 12.5%	104 40.6%	77 30.1%	43 16.8%	256 100.0%
全体	76 10.0%	252 33.1%	218 28.6%	215 28.3%	761 100.0%

p<.01

表12 あなたは、お住まいの地域で、大人の人たちと話をすることがありますか、ありませんか

	よく話をする	ときどき話をする	あまり話をしない	ぜんぜん話をしない	合計
若年世代	29 14.2%	71 34.8%	56 27.5%	48 23.5%	204 100.0%
中年世代	80 26.6%	142 47.2%	65 21.6%	14 4.7%	301 100.0%
高年世代	100 39.1%	114 44.5%	35 13.7%	7 2.7%	256 100.0%
全体	209 27.5%	327 43.0%	156 20.5%	69 9.1%	761 100.0%

p<.01

表13 あなたは、いまお住まいの地域に愛着を感じていますか、いませんか

	非常に愛着を感じている	やや愛着を感じている	あまり愛着を感じていない	ぜんぜん愛着を感じていない	合計
若年世代	56 27.6%	95 46.8%	39 19.2%	13 6.4%	203 100.0%
中年世代	95 32.0%	150 50.5%	45 15.2%	7 2.4%	297 100.0%
高年世代	128 51.8%	91 36.8%	26 10.5%	2 0.8%	247 100.0%
全体	279 37.3%	336 45.0%	110 14.7%	22 2.9%	747 100.0%

p<.01

表14 あなたは、お住まいの地域の県庁や役所、役場などが実施している防犯活動を見たり聞いたりしますか。しませんか

	よく見たり聞いたりする	ときどき見たり聞いたりする	あまり見たり聞いたりしない	ぜんぜん見たり聞いたりしない	合計
若年世代	18 8.8%	58 28.3%	60 29.3%	69 33.7%	205 100.0%
中年世代	46 15.2%	124 41.1%	67 22.2%	65 21.5%	302 100.0%
高年世代	61 23.9%	91 35.7%	67 26.3%	36 14.1%	255 100.0%
全体	125 16.4%	273 35.8%	194 25.5%	170 22.3%	762 100.0%

p<.01

表15 あなたは、お住まいの地域で、警察の活動を見たり聞いたりしますか。しませんか

	よく見たり聞いたりする	ときどき見たり聞いたりする	あまり見たり聞いたりしない	ぜんぜん見たり聞いたりしない	合計
若年世代	12 5.9%	53 25.9%	61 29.8%	79 38.5%	205 100.0%
中年世代	21 7.0%	98 32.7%	108 36.0%	73 24.3%	300 100.0%
高年世代	30 11.7%	81 31.6%	98 38.3%	47 18.4%	256 100.0%
全体	63 8.3%	232 30.5%	267 35.1%	199 26.1%	761 100.0%

p<.01

表16 警察は、お住まいの地域の犯罪や非行に対して、十分に対応してくれていると思いますか。思いませんか

	十分に対応してくれていると思う	ある程度なら対応してくれていると思う	あまり対応してくれていないと思う	ぜんぜん対応してくれていないと思う	合計
若年世代	13 6.5%	93 46.7%	65 32.7%	28 14.1%	199 100.0%
中年世代	28 9.4%	157 52.9%	93 31.3%	19 6.4%	297 100.0%
高年世代	40 16.2%	130 52.6%	69 27.9%	8 3.2%	247 100.0%
全体	81 10.9%	380 51.1%	227 30.6%	55 7.4%	743 100.0%

p<.01

日常的な地域生活が他世代と比較して濃密であり、それだけに子どもの犯罪被害・非行に対する抵抗性・領域性・監視性も高いのではないだろうか。

(5)「犯意ある行為者」をいかにして減らしていくかという犯罪原因論の重要性が失われることはないが、犯罪予防の場面に無理に原因論を持ち込んでしまうと、まだ犯罪を起こしていない人を犯罪者扱いしてしまう(ラベリングが発生してしまう)など、子どもたちの人間不信を惹起し、また、人権侵害になるおそれもある(小宮, 2008)。環境犯罪学は、人ではなく「場所」、「空間」に着目する。犯意ある行為者をいかにして減らしていくかという視点ではなく、犯意ある行為者が「犯行に及ばない」場所・空間をいかにしてつくっていくかという視点に立つ。地域社会において実態把握に基づいた効果的な社会的コントロールが展開されるとともに、それが地域社会の組織化及び社会化エージェントとしての役割の回復へとつながっていくことが望まれる。

《引用・参考文献》

- 警察庁 2008, 『警察白書〈平成20年版〉』ぎょうせい
- 警察庁 2009b, 『平成20年の犯罪情勢』
<http://www.npa.go.jp/toukei/seianki7/h20hanzaizyousei.pdf>
- 中村攻 2000, 『子どもはどこで犯罪にあっているか—犯罪空間の実情・要因・対策』晶文社
- 小宮信夫 2005, 『犯罪は「この場所」で起こる』光文社
- ケリング(Kelling, G. L.)・コールズ(Coles, C. M.) ; 小宮信夫監訳『割れ窓理論による犯罪防止—コミュニティの安全をどう確保するか』2004年, 文化書房博文社

フェルソン (Felson, M.) ; 守山正監訳『日常生活の犯罪学』2005年, 日本評論社

小宮信夫 2008, 「子どもと地域を犯罪から守る—犯罪機会論と地域安全マップ—」新たな行動計画策定に関する有識者ヒアリング(第8回)概要 <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/hanzai/hearing/dai8.pdf>

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計1件)

横山卓「子どもの安全と地域防犯活動」(2009年5月28日脱稿) 住田正樹・武内清・永井聖二監修『子ども社会シリーズ・第4巻・子どもと地域社会』第Ⅲ部・第9章、頁未定、2009年9月発行予定、学文社

〔その他〕

ホームページ等

横山卓『事象(イベント)としての犯罪・非行に対する地域住民の社会的コントロール』(課題番号19730529)平成19年度～平成20年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書、2009年3月、総頁数88頁、城島印刷株式会社

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山 卓 (YOKOYAMA TAKASHI)

福岡女子短期大学・文化コミュニケーション学科・講師

研究者番号：60369387

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：